

行為、即ち「戦争」が地球上から消え去ることを望みます。そして各戦場や戦禍によって散華された多くの皆さん、敵・味方を問わず、御冥福を祈ります。

満州横断 台湾従軍記

佐賀県 溝上 平一

私は大正十四（一九二五）年四月五日生れで、当時の家族は父・廉一、母・ラク、祖母・カメに、姉・キクエ、妹・フミエ、初子、吉子、トミエ、弟・幸男、平八で、私は長男で、家族十一人の大家族です。

家業は農業で、米麦が中心です。米の収穫は反当り九俵ほど出来ていましたが、麦は反当り四俵ほどこか収穫出来ません。耕作面積は全部で二町八反歩ほどで、ほかに海面ではアサリ貝とカキの養殖をしておりましたので大変忙しい毎日でありました。今日まで皆元気で働きながら楽しく過ごしております。

姉妹弟達も今も近くに住んでいます。一人は自動車整備士になり、また教員をして、現在は退職している者も皆達者で暮らしているのが何より

です。

私は徴兵検査に合格して、昭和十九（二九四四）年十月一日に久留米第四十八部隊に入隊しました。満州への補充要員でしたので、十月六日、午後九時頃、久留米駅出発、門司港まで汽車で行き、関釜連絡船で釜山港へは八日の到着きました。

玄界灘は大変波の荒い海と聞いていましたが、当日は非常に穏やかで良い船旅でした。釜山に上陸して汽車で満州を目指して行きました。

十月十二日に第三百六部隊の第六中隊（西山隊）東寧県城子溝に着き、同時に同地区の警備に付きましました。我が中隊、西山隊は銃剣術の強い中隊でした。度々表彰も受けるほどの強い中隊でありますから一日中猛練習で、みっちり鍛えられました。

十月中旬には、早くも屋内はペーチカが焚かれていました。十月十八日でした、第一展望台に陣地構築に行きました。ソ連の戦車防禦のもので、川向こうはソ連の兵隊が目の前におり、二週間ほどで作業は終わって本隊に帰りました。十一月か

ら十二月にかけて演習がありました。馬を引く重砲隊の方々の夜行軍は、冬期の演習でもあり、倒れて起き上がれない者も出るなど、何とも言い様もない厳しいものでありました。

夜の狼の声の無気味さは、思い出しても身の毛のよだつものがあります。飯盒の飯は氷り付き、防寒服は重く、吐く息は白く、眉毛も氷るなど、夜営では動かないのでどうしようもなく大変でした。一週間ばかりの演習でしたが長かったです。

十二月十日頃からであったと思いますが、一個分隊が防空監視哨勤務を命ぜられ、二人ずつの交替で任務に就きました。寒さが身にしみる厳寒の勤務中、十二月二十日過ぎに動員命令が出て、城子溝を出発しました。

十二月二十三日、東寧県の県境を通過して二十五日に関東州の境を通過、二十六日には旅順の柏嵐子に到着しました。旅順では上陸演習をしたり、山岳演習では乃木大将で名高い日露戦争の時の二〇三高地に登り、また肉弾三勇士の偲ばれる場所

での特訓演習があり、先人の苦勞を体験すること
も出来ました。

昭和十九年も終わり、昭和二十年を迎え、正月
二日の昼から各中隊で無礼講で酒盛りになり、日
本酒の味を堪能しました。格別おいしかったのを
思い出します。

十二月二十二日の夜、城子溝を出発して、二十
六日に旅順に着きましたが、その間の列車の中は
人間の吐く息が白く氷り、車内は真っ白く氷が張
り冷蔵庫のようでした。貨車内では日本酒が氷り、
呑むことが出来ないで、皆の体温で温め、少し
溶けた分を一口呑んでは、次にまた温めて、回し
呑みしたこともありました。そして旅順に着くと
完全軍装と弾百二十発、手榴弾二発、食料甲号一
日分と乙号乾めんぼう三日分を渡され、身に付け
る物約五十キロ、駅から宿营地まで三キロほどの
道を行軍しました。

途中倒れる者も出て、起き上がることの出来な
い戦友の装備も背負って歩きました。それから一

構築に当りました。しかし敵機の来襲が頻繁にな
り、特に我々の陣地を海面すれすれに低空飛行で、
双発双胴のロッキードハドソンでしょうか、機銃
掃射をしては帰ります。その時、戦死者二人が出
ました。村上一等兵と西山君でした。

高射砲陣地からも対空射撃を行い、見事敵機に
命中、敵機が海中に落下したのを見ることが出来
ました。私も四月一日付けで陸軍一等兵となりま
した。

六月二十五日の台湾沖海空戦に飛び立ったのは
二十機でした。が二十六日朝帰って来たのは三機
でした。

戦況は日増しに厳しくなり、台南の町は焼野原
になりました。ある日、B 24 爆撃機が一機だけが、
高度八千メートルほどで飛来して来るのを発見、
我が高射砲はこの時とばかりに近くまで引き寄せ、
一斉射撃を行って見事撃ち落すことが出来ました。
その時も凄じいものでした。

八月十四日に部隊全員集合でラジオを聞きまし

月十日には旅順を出発して、一月十三日には釜山
に到着、釜山で乗船準備のため十日間ほど滞在し
て、二十五日に釜山を出港、門司港に到着、二十
六日の朝に門司港に上陸しました。

ここで体操して体をもみほぐし、日本の土地を
踏みしめて、再び乗船して一月三十一日門司港を
出航、二月六日には台湾の基隆に上陸しました。
その間、海は大荒れで大変でした。仁川と上海の
間は穏やかで、その時の船団は六隻で護衛艦三隻
が警備してくれました。しかし上海沖から海はま
た大荒れで、全員船酔いして立つことも出来ず苦
しみました。一万トン級の船も波の谷間に入ると
見えなくなるほどでした。

その時、船に積んでいた上陸用の舟艇が海に落
ちるし、三人の者が行方不明で、内一人は船上で
死亡しました。

台湾の基隆上陸は二月八日、台南着と同時に安
平で陣地構築に従軍し、連隊から離れることにな
りました。そして水際撃滅隊として独立台南安平

たが雑音が多くてよく聞くことができませんでし
た。八月十五日に水際撃滅隊長より「日本は負け
た」と云われて信じられませんでした。そして九
月十日頃でしたが武装解除となりましたが、帯刀
だけは許されたのですが、治安が悪いため台湾司
令部より憲兵隊への指示によって、私達の水際撃
滅隊より転属命令が出て、私もその一員として加
わりました。同時に陸軍上等兵に進級しました。

さらに治安は悪くなり、中国の正規軍が台南に
来ましたのが十月の初旬頃でした。その軍隊を迎
えるために台南の駅前に歓迎門を造り、手に手に
三色旗を持って市民は歓迎したのですが、台南駅
に下車したのは中国軍一個小隊ほどでした。

私達憲兵隊は護衛のために出動、警備をしまし
た。降り立った中国軍は天秤棒をかついだ兵隊様
でした。二十人〜四十人ほどであったと思います。
これを見た住民は一言も云わず蜘蛛の子が散った
ように去りました。十二月十九日、第四十八連隊
の原隊に復帰しました。

そして新年を迎えた昭和二十一年一月一日、復員命令が出て高雄港集結となりました。そこで復員のための検診を受け、高雄港を出航して一月二十六日海防艦で鹿児島港に着き、二月四日検疫を受けてそれぞれ故郷に帰ることができました。

家族に何の連絡も無しに帰ったので皆びっくりして迎えてくれました。戦地で亡くなられた戦友のことを思うと、家族の皆様は何と申してよいやらただ安らかにご冥福をお祈り申し上げますのみでした。

その後は家業の農業をしていますが、昭和二十四年九月に第一回戦友会を唐津の汐湯温泉で行いました。その時に中隊長の西山大尉殿ほか六十数人が集い、生きて帰られた喜びと戦場の苦労話に花が咲き、盛大な集いが出来ました。

その後は各年ごとに戦友会を行って来ましたが、昭和四十年頃には関東軍の第三百六十部隊の戦友会に参加した時に、連隊旗の房を持って帰って来た猪渡大尉殿が連隊旗を再生して、その後は軍旗

祭をして毎年四月、桜の花の咲く頃に行うようになりました。

以来、十年ほどになりましたが、次第に皆年を取り、出席者も少なくなり、今では同年兵だけで佐賀県内で行っている状況です。

戦後六十年にして八十歳を越え、我が身も自由でなくなりつつあり、二度と戦争のない平和が続きますよう祈るばかりです。現在の農業も子供に譲り、余生を楽しく暮らしたいと思っています。